

研究ノート

『近代映画』における読者意識の形成と若者文化

The formation of readers conscious and youth culture in popular magazines for amusement “KINDAI EIGA”

田中卓也

要約

近代映画社発刊の『近代映画』は、戦前から発刊されていた雑誌である。映画俳優の記事を中心に掲載した同誌は、70年代以降にスタア・アイドルらを中心とした誌面構成に大きくシフトした。また、若者の「性」の相談コーナーや進路、就職に関する相談コーナー等も掲載され、誌面が「学校」化していくことになった。80年代後半には「校則」の不平不満を伝えるコーナーも登場し、学校に不平、不満を抱く若者読者らの憩いの場となっていたが、同誌は若者読者の思い、感情を受け入れ、若者読者のための雑誌としてあり続けた。

キーワード：近代映画、アイドル・スタア、読者投稿欄、校則、読者共同体

- I. はじめに—本研究の目的と先行研究の検討—
- II. 『近代映画』誌の目次と内容の変遷
- III. 『近代映画』読者投稿欄に寄せられた“声”と校則への反発
- IV. おわりに—時代に合わせた誌面編集方針転換と『近代映画』の廃刊—

I. はじめに

— 本研究の目的と先行研究の検討 —

本研究は、雑誌『近代映画』について取り上げ、同誌の誌面構成および内容の変遷を辿りながら、誌面の特徴について明らかにするものである。また当時読者であった独意識についても考察するとともに、若者文化がいかに改正されていたのかについても見出すことに努めるものである。

『近代映画』誌は、第二次世界大戦の終戦間もない、1945（昭和20）年12月に近代映画

社より発刊された。戦後の映画界を復興することを目的にしながら、当時の役者、映画俳優、女優らをピックアップしながら、誌面を構成していた。1960年代以降になると、テレビの普及にともない、同社編集部はこれまでの映画スターから、タレントらを起用するようになっていった。1952（昭和27）年に集英社より発刊された『明星』誌や、1959（昭和34）年に平凡社（現在のマガジンハウス）より出版された『平凡』誌と並び、スタア・アイドル雑誌へと誌面内容が変更されていくこ

1) 雑誌『明星』に関する研究については、田島悠来の研究が知られている。田島の研究には、『アイドルのメディア史—『明星』とヤングの70年代—』（森話社、2017年）をはじめ、同「1970年代の『明星』読者ページにおける読者共同体—「ハローキャンパス」の事例分析を中心に—」（同志社大学『評論・社会科学』103巻、2012年）、『雑誌『Myojo』における「ジャニーズ」イメー

ジの受容」（『マスコミュニケーション研究』第58巻、2000年）など多くの研究が存在している。また『平凡』については、阪本博司の研究に多くの蓄積が存在している。『平凡』読者の連帯と戦後大衆文化」（『マスコミュニケーション研究』第60巻、2002年）、同『平凡の時代—1950年代の大衆娯楽雑誌と若者たち—』（昭和堂、2008年）などがある。

とになった¹⁾。

1970年代になると、『近代映画』の誌面では、「性」に関するコーナーが登場するようになる。若者の性への興味関心について、医学博士らがわかりやすく性知識についての説明や、若者読者の性に関する悩み相談コーナーとしても活用されることになった。また当時のタレント、スタアやアイドルの記事を今まで以上に多く掲載されることになる一方で、読者投稿欄においても、「校則」について読者らに対し意見を求めるような企画も登場している。

ここでは1980年代以降に時期を限定し、同誌の紙面内容と読者意識についてみながら、若者文化とどのようにかかわることになったのかについてみることにしたい。

II. 『近代映画』誌の目次と内容の変遷

(1) 1970年代の同誌の目次および内容

まずは1970年代の同誌の目次はどのようなになっていたのか。以下にみてみることにしたい²⁾。

【目次】< >内はページ数。下線は執筆者。

- ・ 特別企画スター特ダネ指令室／(吉沢京子、加山雄三、竹脇無我、桜木健一、前田武彦、三船敏郎) <45ページから>
- ・ 「亡き母への贈り物」(加山雄三) <72ページから>
- ・ 「フレッシュ対談 桜木健一／岡崎友紀」 <33ページから>
- ・ 「ファン対談」(美樹克彦／酒井和歌子) <54ページから>
- ・ 「ラブラブ対談」(千葉真一／野際陽子) <58ページから>
- ・ 「リレー対談」(内藤洋子・松橋登) <102ページから>
- ・ 「風の慕情」(オーストラリアロケ随日記) <69ページから>
- ・ 黒沢年男「ヨーロッパ紀行」 <50ページから>

- ・ 「1年半ぶりのテレビ・ドラマ」(酒井和歌子) <38ページから>
- ・ 「当り屋藤圭子の追跡・魅力解剖」 <143ページから>
- ・ 「任侠エース高倉健のスペシャルレポート」 <93ページから>
- ・ 「ワコちゃん日記第16回 酒井和歌子」 <78ページ>
- ・ 「前武対談 ゲスト 水前寺清子」 <80ページ>
- ・ 「告白自叙伝 にしきのあきら」 <96ページから>
- ・ 「黒沢映画『どですかでん』出演者に聞く」 <75ページから>
- ・ 「渥美清(第2回) スターの見た海外旅行」 <106ページから>
- ・ 「スターへの条件」(渡瀬恒彦) <148ページから>
- ・ 「純ちゃんのインタビュー」(雪村いづみ) <156ページから>
- ・ 「おのろけ対談」(はかま満緒夫妻) <170ページから>
- ・ 「あしたのジョーに聞く 石橋正次・赤松愛」 <126ページから>
- ・ 「ディスク・ジョッキースターの住まい」 <124ページから>
- ・ 「人気歌手のテレビ出演料」 <146ページから>
- ・ 「寺内タケシ・林マキの師弟愛」 <53ページから>
- ・ 「フレッシュ・ホープの紹介」 <151ページから>
- ・ 「スタークイズ(頭の体操)」 <122ページから>
- ・ 「劇画 藤圭子」 <111ページから>
- ・ 「CMはお色気時代」 <119ページから>
- ・ 「スター評」 <120ページから>
- ・ 「テレビ話題のスナック」 <152ページから>
- ・ 「スターライト愛情物語」(井上隆道・絵柳柊二) <174ページから>

2) 同誌第26巻第8号(1970年7月1日号、全104ページ)の「目次」。

- ・「スタジオ・ゴーストアップ」
＜100ページから＞
- ・「テレビ思い出映画館」＜178ページから＞
- ・「日本映画観賞ノート」＜184ページから＞
- ・「テレビ洋画劇場」＜180ページから＞
- ・「読者サロン」＜197ページから＞
- ・「とじ込み特集 さよなら百恵・21年間の歩み」＜111～134＞
- ・「学園ドラマ・ニュース『ただいま放課後』ほか」＜135～141＞
- ・「高島秀武のヒデタカ対談（4）石野真子」＜142～147＞
- ・「アイドル・クローズUP 松村和子・トライアングル」＜148～151＞
- ・「スターエッセイ・スポーツで流した涙 倉田まり子」＜152～155＞
- ・「感動した本は何？サールスターアンケート」＜156～157＞
- ・「NEWS NEWS」＜158～160＞
- ・「TV WIDE」＜161～163＞
- ・「MUSIC MUSIC」＜164～174＞
- ・「新作映画紹介『アメリカン・ジゴロ』ほか」＜175～179＞
- ・「スターのスケジュール表」＜180～183＞
- ・「今月の星占い ルネ・ヴェンダール・ワタナベ」＜186＞
- ・「日本映画指定席『サイボーグ009』ほか」＜187～191＞
- ・「近映なんでも相談室 塚原雄太」＜192～193＞
- ・「ヤングSEXカウウンセリング 奈良林祥」＜194～197＞
- ・「フレンド・サロン」＜198～204＞

当時の人気スタアらの記事を掲載しているなか、映画情報に関する記事も載せられていた。スタア・アイドルの誌面の多さに目を引く。また、下線部の「読者サロン」では、誌面2ページから4ページ程度の紙幅に10数名の投稿者の投書が掲載された。

（2）1980年代の同誌の目次および内容

1980年代になると、同誌はどのような誌面構成になっていたのか。以下に目次を見てみたい³⁾。

- 【目次】＜ ＞内はページ数。下線は執筆者。
- ・たのきん映画「スニーカーぶるーす」撮影日記＜77～81＞
 - ・「松田聖子VS河合奈保子 新ライバル双曲線比較＜82～87＞
 - ・「田原俊彦直撃インタビュー」＜88～91＞
 - ・「井上純一・真子・美和子・野村義男『竹とんぼ』座談会」＜92～95＞
 - ・『ただいま放課後』近藤・小林・松原秀樹 新トリオ爆笑座談会」＜96～101＞
 - ・「スター生いたちストーリー 三原順子」＜102～105＞
 - ・「渋谷哲平 “男の美学” とは」＜106～110＞

80年代の目次を見てみると、「たのきんトリオ」（田原俊彦・野村義男・近藤真彦）、松田聖子、河合奈保子らアイドル記事が掲載されている⁴⁾。また「たのきんトリオ」は、本田博太郎・寺泉哲章主演であった「ただいま放

3) 同誌第38巻第16号（1980年11月号、全104ページ）の「目次」。

4) 80年代はアイドルが大量生産された前全盛期の時代であるといわれる。とくに1982年にはシブがき隊、小泉今日子、堀ちえみ、中森明菜、早見優、松本伊代らが続々とデビューを果たし、彼らのことを「花の82年組」とよんでいる。

5) 田原俊彦、野村義男、近藤真彦の3名の頭文字「田」、「野」、「近」から命名されたジャニーズのトリオである。3名で出演した武田鉄矢主演のTBSドラマ「3年B組金八先生（第一シリーズ）」（1979年10月～1980年3月）でブレイクし、80年

代を代表するジャニーズアイドルとして人気を得た。同じくTBS系で放映された「たのきん全力投球」（1980年10月～1982年3月）では、3人が中心となり、共演者らとコント、歌、クイズ、ミニドラマを行った番組である。トリオはまずか1年半ほどで解散となった。その後は個人での活動が目立つようになり、田原は役者および歌手として、野村は「The good-bye」とよばれるバンドを結成し、ボーカルギターとしてバンド活動を展開した。近藤は、歌手として活躍し、1987年には「愚か者」で「日本レコード大賞」を受賞している。

課後」といわれる学園ドラマについても出演し人気を誇ることになった⁵⁾。当時の『近代映画』誌面は「アイドルと学園」を取り上げるのが一つの特徴であった感が見受けられる。以降、この誌面構成の流れはおよそ1988(昭和63)年ごろまで継続される。

また下線部を示した「近映なんでも相談室 塚原雄太」、「ヤングSEXカウンセリング 奈良林祥」についての掲載も目を引く⁶⁾。当時の読者が中学生、高校生であることから、若者として悩み、とりわけ思春期であり「性」への関心が高まることを想定し、読者の性への悩みや不安を解消させる機能を果たした。誌面では毎号3名程度の投稿を掲載し、著名な教育研究者、医師らが回答している。同誌では毎年夏号において、特集を組み、「性の相談」に応じることに努めた。両コーナーは、1985(昭和60)年以降は誌面への登場はみられなくなった。

Ⅲ. 『近代映画』読者投稿欄に寄せられた“声”と校則への反発

(1) 投書欄「フレンドサロン」の登場と女性読者のアイドルへの熱い思い

『近代映画』の誌面では、映画俳優をはじめスタア、アイドルの記事が掲載されていたが、読者向けの投稿欄についても毎号ではないが、載せられていた。1970年代ごろより「フレンドサロン—読者の広場—」という欄が設けられた。同欄では、おもに「アイドルやスタアの似顔絵」、「アイドルの好き嫌い言わせてもらおう会」、「スターの素顔拝見 NICE SHOT」、「アイドルなんでも相談室」、「FANCLUB紹介」、「ポエムコーナー」など、当時のアイドルやスタアを取り上げた記事が目立つ。「ポエムコーナー」では、投稿者の好みのアイドルに捧げる愛情があふれたポエムが掲載されており、たのきんトリオのひと

りであった近藤真彦のファンと思われる、ペンネーム「まっちの瞳」の投稿作品「想い」を見てみると「あなたのうしろ姿と見ているとそっと・・・寄りそっていたい あなたの笑顔を見ているとずっと・・・その正直な微笑みにつつまれていたい そう想うと私の心は厚く痛みます 男性を愛する苦しみ 初めてです 今この想いがあなたに伝えられたらどんなにすばらしいか・・・」という作品には、アイドル近藤真彦への熱い思いが込められている一少女の愛の一途さ、苦しさを読み取れよう⁷⁾。

また先述の近藤と同様に、たのきんトリオのひとりであった田原俊彦がかつて自身の出演していた「3年B組金八先生」で演じた「沢村栄治」にあてたポエムをペンネームの「栄治only」はつぎのような作品が誌面に掲載された。「ガラスの小ビンをむねのポケットに入れ いつももっていたの どんな意味か知っていますか? あなただけにそっとおしえます・・・あなたの名前をつめこむのです! きづいていましたか? 私の気持ち あなたへの恋心 知ってますか 少女から女へと変わった私 あなたに恋を感じた時 私は変わったのです

そうです 私を変えたのは あなたです きっと・・・一つだけ 教えてください!! 私の気持ちにきづいたとき 私を受け止めてくれますか?」という栄治への愛情がつめこまれた作品である。「私の気持ち あなたへの恋心 知ってますか 少女から女へと変わった私 あなたに恋を感じた時 私は変わったのです

そうです 私を変えたのは あなたです きっと・・・一つだけ 教えてください!! 私の気持ちにきづいたとき 私を受け止めてくれますか?」とあるように、栄治への愛で「少女から女へと変わった私」を「受け止め

6) 「塚原雄太」は、栃木県出身の教育研究者である。夜間中学の設立に力を注いだ人物としても知られ、荒川区の中学校教員に勤務したのち、夜間学級で20年以上にわたり教鞭をとった。TBSラジオお「全国子ども相談室」の回答者としても知られている。また「奈良林祥」は、医学者(医

学博士)であり、「性の研究者」としても知られている。1973年には女性の性相談に応じるカウンセリングルームを設けたことで有名となり、以後性に関する多くの著書を執筆した。

7) 同誌第37巻第10号(1981年10月1日)

8) 同上。

てほしいという強い愛情が放言されている。このポエムにあるように、当時の少女（読者）のなかには、アイドルに熱狂する者も少なくなかった⁸⁾。

また「キミの質問に自筆で答えるスターQ & A」というコーナーでは、当時の人気アイドルらが投稿者に対し、一枚のはがき大の紙面に「自筆」で回答するというものであり、アイドルファンにとっては大変満足できる内容のものであった。掲載されるのは6人程度であったことから、掲載される倍率は比較的高かったことが推測される。アイドルファンには心から喜ぶことのできる誌面構成となっていた。

そのほかには「読者の声 ボイスコーナー」、「文通コーナー」、「おたより交換コーナー」、「ANGRY TALK もっと怒りを」、「I LOVE 命伝言板」、「INFORMATION」、といわれるコーナーが存在していた。

(2) 「HELLO kids」への改称

同誌第40巻第8号（1984年8月号）より、投書欄名が「フレンドサロン」から「HELLO kids」に改称された。内容はそれまでと大きく変わらない。記事の中にはCCBの渡辺英樹に関する投書が寄せられている。「1月号にのっていた“英樹に涙を届けて”さんの気持ち、よくわかる。私も英樹くんのファンです。夏のコンサートに行ったとき私も同じ思いをしました。（中略）英樹くんを好きになったことを、大人になったときにきっと思い出さずにはずです。そういう気持ちはいましか味わえない青春の思い出になると思います」とペンネーム「英樹の卵」は誌面で語っている⁹⁾。

また、ペンネーム「英之&誠人にLOVE」は、「1月号の“英樹に涙を届けて”さん！あなたの気持ち、よくわかります。終わってから涙が出るほど感動・・・もう最高でした。野音、学園祭でのコンサートよりももっともっ

と盛り上げていこーね！」と共感していることをうかがわせる¹⁰⁾。さらにペンネーム「そんな天使の独り言」は、「1月号の“英樹に涙を届けて”さんに同感！！私も行きましたよ。もおすごく、か・ん・げ・きました！！雨の中いっぱい私たちのために演奏してくれたC-C-Bのみなさんが、かわいそすぎると思いませんかあ・・・？」と演者のC-C-Bを気にかけてながら、共感を示していることがうかがえよう¹¹⁾。このように読者コーナーでは、おたよりを通じて仲間の絆、連帯感を示すようなこともよく見られるのであり、同誌においても“読者共同体”なるものが形成されていたのであろう¹²⁾。

(3) 「KIN-TOMO」・「近友倶楽部（クラブ）」への改称

読者に親しまれてきた投稿欄「HELLO kids」は、同誌第43巻第1号（1987年1月号）より、名称が「読者のページ “KIN-TOMO”」に変更となった。同様の名称変更はこれ以降も続き、同誌第45巻第5号（1989年5月号）より「近友クラブ 読者のページ」に、同誌第47巻第4号（1991年4月号）より「近友クラブ」に、同誌第47巻第6号（1991年6月号）からは「Kintomo club」とローマ字表記のネーミングに改称された。同誌第49巻第1号（1993年1月号）には「キントモクラブ」というようにカタカナ表記に、同誌第51巻第1号（1995年1月号）からは再び「kintomo club」に戻し、以降の所蔵確認分（1996年5月号）まで、この名称が継続したことを確認している。投書欄名の改称が続いたことから、編集部も読者から支援されるものとして、方針が統一されず、混乱していた様子うかがえよう。

さらに「近友」と省略したネーミングのルーツについては、執筆者は不明であるが、おそらくは「近代映画友の会」の略語であろうか。このような事例は、明治・大正期に出版され

9) 同誌第42巻第11号（1986年11月1日）。

10) 同上。

11) 同上、120～122ページ。

12) 「読者共同体」の形成については、セ前掲、田島「1970年代の『明星』読者ページにおける読

者共同体—「ハローキャンパス」の事例分析を中心に—や田中卓也「児童雑誌『金の船』における読者共同体の形成」（中国四国教育学会『教育学研究紀要』第48巻第1号（教育学部門）、2008年）などを参照。

た少年雑誌、少女雑誌さらには、戦後に発刊されたそれらにも同様の事例があることをことうわておきたい。

(4)「近友校則箱」の誌面への設置と校則への若者意識・主張

読者らの学校や先生への不満は、これにとどまらなかった。『近代映画』の投書欄では1986(昭和61)年～1987(昭和62)年の1年間限定で、「近友投書箱」とよばれるコーナーが存在した。同コーナーでは、読者である中学生・高校生が、通学している学校の校則を誌面で紹介し、不平不満を吐露するというものであった。以下にその一例を紹介したい¹³⁾。

□はじめまして、中学1年生の男子です。物を取り上げられることってとてもつらいことです。のっけからこんなこと言ってもビックリなさるだけだと思いますけど、つまり校内で規定(?)以外のものを持っていると没収!なんです。僕が何を取り上げられたかという、カラーマーカーです。赤とピンクと銀色です。何故なんですか?と問いかけると、必要ないからだ!こんな持っているといタズラ書きをするから、先生があずかっておく。卒業するとき返してやる、だって……。僕はそんなことしませんよ、と言うと、持っているといつ机やイスに書いてしますもんだからね、とさっ。そんなようにうまくまるめこまれて没収された品々が職員室の隅に山積みになってホコリをかぶっています。もっと明確な理由なら納得するんですがね。あと、すごいのはトイレに5分以上いてはいけないうとホームルームの時間で先生が叫んだことです!トイレが長いと中で何かをしていると思うらしいです。下痢の時はどうしたらいいんですか?5分たっていそいで出てまた中に入って……。そんなのできるわけありません。疑いの目はいつでもどこでも光ってる、そんな感じです。もっと僕達を

信用して欲しいです。僕達はなんだかんだ言っても先生方を信用してるんですから、だから授業を聞いてるんですからね。

(愛知県のぼる)

「中学1年生の男子」である「愛知県のぼる」の投書である。「校内で規定(?)以外のものを持っていると没収!なんです。」という内容について不平を抱いており、「カラーマーカー」を取り上げられ「赤とピンクと銀色」のです。何故なんですか?と問いかけると、「取り上げた先生も「必要ないからだ!こんな持っているといタズラ書きをするから、先生があずかっておく。卒業するとき返してやる」ということで、日常の中学の生活のなかでも見られるシーンである。

のぼるが話しているように「もっと明確な理由なら納得するんですがね。あと、すごいのはトイレに5分以上いてはいけないうとホームルームの時間で先生が叫んだことです!トイレが長いと中で何かをしていると思うらしいです。下痢の時はどうしたらいいんですか?5分たっていそいで出てまた中に入って……。そんなのできるわけありません」と述べるように、非常に厳格な規則であることがうかがえる。またいまでいう、「パワーハラスメント」と考えられるような教師の行為であることもうかがえよう。先生の注意や指摘に反発したくなる年頃である「のぼる」であるが、文末に「もっと僕達を信用して欲しいです。僕達はなんだかんだ言っても先生方を信用してるんですから、だから授業を聞いてるんですからね」と話を合しながら、調子よくふるまっている「のぼる」のあどけなさも残る投書である。

次の投書は、高校を卒業した浪人生のものある。以下にみてみよう¹⁴⁾。

□ボクの通っていた高校は県下でも有名な進学校なんです。進学校なんていうと校則が厳しいように思えますが、実にはのびのびし

¹³⁾ 同誌第42巻第10号(1986年10月1日)

¹⁴⁾ 同上。

とした校風なんです。校則というのはもちろんあるのですが、それは単位、進級、生徒会規則に関するものなどで、普段の生活に関するものは、「生活規定」というものがあります。この中の文章はすべて「・・・しよう」という形なんです。浮くそうなどについてもわずか3、4行で「A校生らしい端正な服装をしよう。6～9月までは夏服になろう」というていどの内容です。髪型もパーマは禁止となっているのですが、これは明文化されていなくて、生徒会長などは男なんです。長い髪を後ろでしばっていました。これだけ自由な学校なんです。が、いわゆる不良などはいないんです。そればかりか一流大学へも多数入学しています。むしろこれは自由であればこそその結果だと思えます。だからボクは、よく聞く高校の厳しい規則というものは全く信じられない。

ましてこれを守らせるために暴力をふるう教師などは、非常に腹立たしく思います。
(浪人生)

「浪人生」の主張が掲載されている。彼は進学校に通学していた学生であったのであろう。自由な校風で生徒が日々勉強に意欲を燃やすような生徒に囲まれて、雰囲気はたまたんでいた「浪人生」の彼であるが、「校則」が各学校によって異なり、それに不平・反発を示すような生徒がいることについて、信じられない気持ちで一杯なのであろう。むしろ進学校は「校則」はひとまずあるものの、むしろ無関心の生徒が多いことも影響してるかもしれない。

ではこの投書に回答しているものは誰であるのか?といった問題がおこる。編集部員(の総体)であることは見当がつくであろう。しかしながら投書家の投書に回答するこの存在こそ、当時の読者と雑誌をつなぐ役割を担っていたといえる。

投稿者は、さらに学校や先生への不満を吐露していくことになる。時代はすこし戻

ることになるが、「世界に広げよう読者の輪 FRIEND SALON」(1977年～1983年)の投稿欄「読者の声」(ボイスコーナー)に寄せられた女子学生からの投書の一節である¹⁵⁾。

◆先生に髪型注意されたけど

わたしの学校の制服はセーラー服なんです。そして、私たちの学校の近くに、もう秘湯微妙に型がちがうけど、人が見たら同じような制服にみえるM高があるですよ。私の学校は女子高で、M高は共学なんです。友達の意中の意図が、その学校にいらんだって!そんなもって制服が似ているからわかんないだろうと思って、放課後友達のH子が、その学校の廊下に入って行って、なんとなくクラブ活動なんかをながめてたの。そしたら、その学校の先生がに「おいっ」って声をかけられたんだって。その子は、やばい、他校生ってバレたのかなって思ったの。すると、「なんや!この髪型は」と先生に注意されたんだって。H子は、ホッとした気持ちと自分の学校の生徒とまちがえられた生徒の気持ちとがいりまじったと申しておりやした。考えたら珍事ですよ。つい笑っちゃった!

(聖子の妹になりたい娘)

◆わたし、社会の先生なんて・・・嫌いです。ちょっと聞いてよ!!私の苗字は全国的にもめずらしい名字で、それに覚えにくいんだよ!それで中2のころから社会の先生だけ、どーしても名前覚えてもらえなかったの。ほんと、社会だけ。中2の時、“キミ”と呼ばれ、中3では“アンタ”、高一で“おみやあさん”、そして今は“名前のわからん子”これだよおー!!初めの1か月くらいならそれでよばれても。

“まだ覚えとらんのかあ”で済んじゃうけど、1年も覚えてもらえんなんて、どえりゃあ腹が立つよ!!1番腹立つのはさあ、授業中指名されたとき。“ハイ、そこのアンタ答えてね”って言われえること。ムカーっ

15) 同誌第38巻第11号(1982年11月1日)

とくるね。だから無視したるんだわ。そうすると、“窓際の22番目、まえからさんばんめのアンタだよ”って言うの。もームカムかっときて、“私はアンタじゃない。○○です！もーいかげんに覚えてください”って言うの、“ごめんね！なかなか覚えられなくて、○○さん”って言いなおすんだよ。でもその次の授業ではもう忘れとるね。“アンタ”って呼ぶもん。もーなんも言えんで！ホントに。他の先生はちゃあんと覚えてくれるのに。社会の先生ってBakkaじゃないの？社会の先生なんて、嫌いだよ

(かわいいフミヤ)

○先生がエプロンで股をしごくのを目撃！！

◆私の学校のK先生は、美術の先生です。ある日、授業が終わったあとそのK先生は自分のしていたエプロンをはずし、またにはさみ前後にこすっていたという・・・それを目撃した。少女AさんとBさん、かわいそーだと覆いました。

(ふみやの妹)

いずれも女子学生の投稿である。女子高生が学校に関する気になっていることや腹が立っていることなどを投書に寄せている。内容をもてわかるように、少女読者らは先生の様子をよく観察していることがわかる。また「教師」の存在は、彼女らには大きいものであり、デリケートな内容の投書であることが読み取れる。

(5) 若者言葉を使用する読者たち—誌面で見られる若者文化—

誌面にみられるように、投稿した女子学生の内容を見てみると、「ルーズソックス」を履き、「Bakkaじゃないの?」「ムカツク」、や「ホント」、「アンタ」などカタカナ表記がみられ、若者言葉が流入している感じがうかがえる。読者投稿欄に寄稿する投稿者らのなかで次第に若者言葉を使用する共同体が形成されることも見られた。

IV. おわりに

— 時代に合わせた誌面編集方針転換と

『近代映画』の廃刊—

同誌では1980年代頃からスタア、アイドルを中心に誌面構成がされていった。それに伴いアイドルのファンなども増加し、誌面で紹介されたり、投書をするようになる。また一方で、若者読者のために性に関するコーナーやお悩み相談室などを設け、読者をさらに獲得していった。また投稿欄の「フレンドサロン」や「HELLO kids」などで若者読者は学校への不平、不満をぶちまける内容が多いにもかかわらず、「近友投書箱」では、校則への不満などをぶちまけた。また投稿欄には不平不満を受け止め、助言を促す機能を設定し、思春期で血気盛んな彼らの心を受け止める、いわば若者読者の味方となった。80年代の同誌は誌面の学校化を行いながら、若者文化を受け入れる誌面作りを行ったのである。

しかしながら1990年代の誌面では、そのようなコーナーは消滅し、「ジャニーズ」系アイドルの記事中心の誌面に大きく変化した。

また、『近代映画』誌が創刊当初から要となっていた「映画情報」についてのコーナーも完全に誌面から消えることになった。

【参考文献】

- 1) 近代映画社『近代映画』(1970年4月号～1996年6月号)「国立国会図書館デジタルコレクション」所蔵資料
- 2) 田島悠来『アイドルのメディア史—『明星』とヤングの70年代—』(森話社、2017年)
- 3) 田島悠来「1970年代の『明星』読者ページにおける読者共同体—「ハローキャンパス」の事例分析を中心に—」(同志社大学『評論・社会科学』103巻、2012年)
- 4) 田島悠来「雑誌『Myojo』における「ジャニーズ」イメージの受容」(『マスコミュニケーション研究』第58巻、2000年)
- 5) 阪本博司「『平凡』読者の連帯と戦後大衆文化」(『マスコミュニケーション研究』第60巻、2002年)
- 6) 阪本博司『平凡の時代—1950年代の大衆

娯楽雑誌と若者たち—』(昭和堂、2008年)

- 7) 田中卓也「1980年代『平凡』における読者意識の形成と若者文化—『たのきんトリオ』に熱狂する読者等と廃刊をめぐる—」『共栄大学研究論集』第14巻、2016年)
- 8) 田中卓也「集英社雑誌『少女ブック』・『明星』における読者像」(日本保育学会第67回大会ポスター発表)。2014年。
- 9) 橋本治(明星編集部編『“明星”50年601枚の表紙』集英社新書、2002年。
- 10) ニュース企画『表紙で振り返る TVガイド50年』(ムック、2012年)
- 11) 市川孝一「若者論の系譜—若者はどう語られたか—(研究ノート)」(文教大学『人間科学研究』文教大学人間科学部第25号、2003年)
- 12) 山口晶子「若者文化としての学校制服—女子高校生の制服おしゃれに着目して—(研究ノート)」(日本子ども社会学会『子ども社会学研究』第13号、2007年)

